絆むすんで⑤

広島戦災児育成日誌から

「天才孤児」苦悩の人生

こころの被爆

広島県五日市町皆賀（現広島市佐伯区）にあった広島戦災児育成所に身を寄せたのは、原爆に親を奪われた子どもたちばかりではなかった。ほかの街から吸い寄せられるように集まった孤児もいた。

いま、広島市安佐北区の団地で、つつましく暮らす七十代の男性もそんな一人。

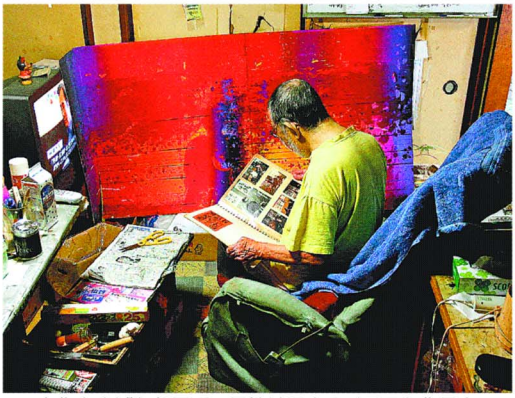
故郷を離れ収容

北九州に生まれた。両親は終戦直前、相次いで病死した。広島に原爆が投下された二日後、故郷は空襲で焼かれた。あちこちの親類宅で気を使いながら暮らすことに嫌気が差し、ある日、列車に飛び乗った。終着駅の広島で降ろされた。育成所に収容された。

「お布団があるのがうれしかった」。追われるように故郷を飛び出た少年にとって、ようやく見つけた安息の場だった。

人生を変える出会いがあった。当時の人気風刺漫画家、清水崑さん（一九七四年に六十二歳で死去）だった。自作の漫画をほめられた。

「この子に絵を習わせなさい」という清水さんの勧めで、絵画教室に通うことを許された。十五歳でパステル画の個展を開いた。「天才孤児あらわる」。孤児たちの広告塔のようになった。両親を原爆で失ったとされたこともあった。



自作を広げた部屋で、男性は過去のイラスト作品を張ったアルバムを眺める　（撮影・藤井康正）

中学卒業後、広島市内の広告会社に勤めた。「孤児だから」という周囲の視線が嫌になり、二十歳のころ東京に向かった。アニメーション作家にあこがれた。

東京で広告デザインの基本を学んだ。職場を転々とするうちに、見合い結婚した。娘も生まれた。米軍横田基地（東京都福生市）専属のイラストレーターになってから、暮らしは安定した。

男性は十年前から今の住まいに落ち着いた。妻や娘の姿はない。「二十年ほど前、バツイチになりましてね。おやじのやり方が分からなかったんですよ」。家族のことは多くを語らない。自宅を訪ねるのは、ホームヘルパーだけ。

過去の作品抱え

六〇年代、孤児たちを取り上げた雑誌があった。ページをめくると、この男性が妻と娘を連れて散歩する写真が載っていた。ほかにも主婦、自衛官、理容師と、いずれも育成所を巣立ち、家庭を築き始めた若者たち。自信に満ちた表情が誌面にあふれる。

「必ずしも、みんな幸せなわけじゃない」。男性は問わず語りに、消息を知る孤児たちの境遇を口にした。商売に行き詰まった人、突然に連絡を絶つ人、若くして世を去った人…。

「おやじのやり方」に悩み続けた自身は、狭い一軒家に、過去の作品を抱えて生きる。家族の肖像を何色で描いたのだろうか。

「原爆の熱線にやかれた人ばかりが被爆者じゃない。家族を失って心がすさんだ私たちは、精神的な被爆者でしょう」

育成所の仲間からは今も手紙が届く。街で再会することもある。だが、笑顔で語れる過去ばかりではない。「原爆が、戦争がなかったら」と思う。でも、口には出さない。

（石川昌義）